

英語の複合形容詞について

桜井雅人

I

複合語 (compound) が文法の中で扱いにくい問題の一つであることは確かである。それは、伝統文法で言えば、統語論 (syntax) と語彙論 (lexicology) の両方の問題を形態論 (morphology) の中に含んでいるからである。つまり、文 (sentence) あるいは単語 (word) のいずれか一方のみにおいては扱えず、その両面的な接近法が必要となってくる。もちろん、語形成 (word-formation) という分野を別に設けて、統語論を加味しながら形態論的に扱おうとする方法が一般的であるのだが、すでに存在している複合語をその内的な構造 (および意味) に従って分類するという形に落ちつきがちである。この方針は、Koziol (1937), Jespersen (1942) はもちろん Marchand (1969), Quirk et al. (1972), Adams (1973) のように構造言語学や変形生成文法の影響を程度のちがいはあっても受けている場合でも、伝統文法的扱いの中では共通しているものと思われる。もちろん、その形成自体に何らかの統語論的關係を認め、形成語の文法性 (grammaticality, grammaticalness) に注意を向け、より一般性のある理解を目ざすような方向に進んでいることは明らかであるが、Quirk et al. (1972) に見られるように、しばしば語形成は文法の付録 (Appendix) としてしか扱われず、文法体系の中の位置づけが不明瞭であってしかも総合性や説得力に欠ける点があることは認めざるをえない。

これに対して、変形生成文法が伝統文法において扱われてきた領域をすべて理論的に解明しているわけではないことは、もちろん言うまでもない。手がつけられているのは、複合名詞 (Lees 1960)、一部の派生語 (Chapin 1967; Ljung 1970)、複合形容詞 (Meys 1975) などであって、しかもそれらの結果がすべて変形理論における共

通の知識として確立しているわけでもない。また、語形成に関することからはそれぞれの理論の正当性を主張するための資料としての価値しか与えられていない、という印象を受けることもしばしばある。統語論にとっては語彙に対して従属的な役割を与えることが当然なのか、あるいはそれ以上のものを与えることができないのかは不明であるが、語彙の方向からの接近法も考えられて当然である。語形成研究にとって変形理論の中で特に重要と思えることはレキシコン (lexicon) の構造・機能に関することであり、Chomsky (1970) で派生名詞類 (derived nominal) は動名詞的名詞類 (gerundive nominal) とは違って変形ではなく基底部 (base) の規則によって導き出されると主張された「語彙論的仮説 (lexicalist hypothesis)」は十分に検討されなくてはならない。また意味の点でイディオム (idiom) との関連性が論じられることになる。

複合語とは何かという問に対して、伝統文法では “we have a compound if the meaning of the whole cannot be logically deduced from the meaning of the elements separately” (Jespersen 1942, p. 137) という意味を中心にした基準（言い替えば、表面的な統語論では扱えないので意味を基準にした）がしばしば考えられてきたし、また構造言語学では強勢 (stress) が特に重要視されていたのだが、これらは特に複合名詞を対象としたものであった（もちろん複合形容詞では強勢は問題にされないということではない；たとえば Kingdon 1958 を参照せよ）。確かに、darkroom は暗くないこともあろうし、redcap は帽子ではない。ところが上記の基準から言うと

- (1) a *thick-skinned, four-footed* animal
- (2) He is a *well-known* writer.
- (3) *sweet-smelling tube-shaped* flowers

のようなものは「複合語」とは認めがたい。というのは、はじめてこれらの「複合語」を見た者でもその構成要素間の（統語論的）関係を認めることができ意味を決定できるように思えるからである。特に (1) の場合は、a *spectacled man*, a *balconied house* などと同種の派生として派生接尾辞 *-ed* が単語ではなくて句 (phrase) に付いたものと考えることができる。また、*bigger-sized, kindest-hearted* のように第一要素の形容詞は比較級・最上級となることがある。すると、これは複合ではなく派生、特に句派生 (phrasal derivation) ということになる (Cf. Quirk et al., p. 981; Marchand, pp. 264-5)。また (2) においても

- (4) These are *well brought up* children.

(5) I received a *carefully written* letter from Tom.

などと同様に派生された句であり、(3)は

(6) flowers which smell sweet

(7) flowers which $\left. \begin{array}{l} \text{are shaped} \\ \text{have shapes} \end{array} \right\}$ like tubes

から導くことになろう。ただ(2)の場合、best-known に対して most well-known (“one of their most well-known physical peculiarities”: *Web 3*) と語としての特徴を示す場合もあり、まだ検討の余地はある。同様のことは複合名詞にも言える。たとえば、a man-eater, a history teacher はもちろんのこと、doorbell, doorhandle, door-knob のような場合でも統語論的關係を認めうるかもしれない (Cf. Lees 1960)。そうとすれば、複合語は名詞も形容詞もその派生においてかなり共通した性質を有していると結論づけることができる。そして、複合語は意味上の規準よりもむしろ機能上のものとして “isolated multibase units which function as single words and reflect certain grammatical processes” (Quirk et al., p. 1020) のような定義にひとまず落ちつくことになろう。ただし、複合語とそうでないもの(句や派生語)との間に明確な区別が絶対に必要かどうかは考えてみる必要がある。言語が総合的な活動であるのならその区別は恣意的になりがちであるが、複合語が変形によるものとして特有な規則(あるいは一連の規則の特有な組み合わせ)を必要とするのなら区別の意味がある。しかし、かなり一般性の高い規則で処理されることになれば、区別それ自体が可能であってもあまり重要性はないと言えよう。

複合語(および派生語)が統語論的に扱われるにはその文法性が問題にされなくてはならない。そして、文の場合と同じく、文法的か非文法的かという二者択一ではなく、文法性の度合い (degree of grammaticality) によって考えることになろう (Cf. Chomsky 1965, pp. 148-53)。しかし、後でみるように、文の文法性と複合語の文法性は平行的に(少なくとも一見したところでは)規則的に対応しているわけではない。そして複合語においても逸脱性 (deviance) の度合いが高いと思われるものもあるだろうし(たとえば、臨時語 (nonce word) などではしばしば見られよう)、正しく文法性の度合いを考えることはかなり困難を伴うように思われる。それは、文における場合よりもその「表面構造」(surface structure)はずっと簡単に見えるがゆえに「根底にある構造 (underlying structure)」はそれだけ多様であると思われるからである。さらには、語としての働きを有しているからであろうか、暗喩的な (metaphorical) あるいはイディオム的な (idiomatic) 意味になることのほうがむしろ自然であると

さえ思われる。また、すでに確立した (established) 複合語が個々の構成要素の変化とは別に継承されることが決してめずらしいことではない (たとえば woman, husband, breakfast など) ことをみると、現代英語においても将来独立した語となる潜在予備軍があり中には顕在化しつつあるものがあることは当然の帰結である。このように、いわゆる「単語 (single word)」では音韻的理由以外にはほとんど問題にされることのない文法性が複合語では重要になってくるのは、その派生に関してある種の規則性を想定しているからである。しかし、ある種の複合語が使われるあるいは使われないということは、はたしてその文法性によるものかあるいは容認可能性 (acceptability) によるものかは即座に判断することがむずかしい (たとえば, middle-aged に対して young[old]-aged は不可, madman に対して saneman, shyman は不可)。このような疑問は派生語 (derivative) にもあてはまり (たとえば, unhappy, waspish, to drum に対して unsad, antish, to piano は不可), 近代古典語系複合語 (Neoclassical compound), 混交 (blend) などの例を見るとさらに高まってくる。もし、複合語や派生語を作る規則がすべての文法的な語を生成しかつ文法的な語のみを生成するように作られなくてはならないのなら、容認可能性との区別をはっきりしなくてはならない。現在広く一般に使われている複合語の中には容認可能であるが非文法的なものがあると考えられることができるだろうか。もちろん、規則化できないから非文法的なのだと考えることはできないし、「特異的 (idiosyncratic)」なものが非文法的なのではありえない。これとは逆に、広く一般に使われるものはすべて文法的に適格であると仮定してみよう。そうすると、いわゆる「新語 (neologism, new word)」の多くはすでに文法的に予測可能であるような規則を作らなくてはならない。しかし、多くの新語をみていると、このような規則を作ることは少なくとも現状ではまず不可能である。新語の中には社会の変化なり科学の発展に伴って生れたものが非常に多く、我々が将来を正確に詳細に見ることができない以上、新語を予測することもやはりできないからである。このような前提に立って複合語を考えてみると、その文法性はある程度限られたものにしか言うことができない。つまり社会の変化などに関係する複合語については文法性を言うことができない。しかし、新語を生み出すこと自体は言語活動であり、しかも共時論的問題である以上、語を生成するしくみに強い制限を加えることはできない。それゆえ複合語の規則は文の規則とはかなりの部分で一致するとしてもまったく同様ではありえず、より柔軟性に富むものとなろう。さもないければ、共時論的原則に基づいて言語を考えることができなくなるからである (Cf. 桜井 1971)。

II

複合形容詞の場合、その構造は一般に複合名詞ほどは多様性に富んでいないと考えられている。もしこのことが事実だとするのなら、複合形容詞には特に第二要素に分詞・派生語など形態的特徴を持つものが多いこと、および程度の差かもしれないが言語外の世界との関係が複合名詞ほど強くないことがあげられよう。しかし、複合名詞の場合と同じく、これまでにそれぞれ特徴のあるいろいろな分類がなされてきた。そこで、ここではそれらの分類のいくつかを概観してみることにする。英語において特に注目に価すると思われるものは、Koziol (1937), Marchand (1969), Quirk et al. (1972), Adams (1973), Meys (1975) であろう (なおこの章では、それぞれ K, Ma, Q, A, Me と略記することがある)。Jespersen (1942) (以下 J と略記) は、興味深い考察が随所に見られるのだが、Ma の原型と思えるので別個にはとりあげない。Hatcher (1951) は近代ラテン語系複合語 (Neo-Latin compound) のみを扱ったもので、ここでは考察を割愛する。なお、Q は文法全体の中で、K, Ma, A は語形成の中で、Me は複合形容詞としてまとめられたもので、観点および対象の中心がそれぞれ異なっているが、もちろん特殊な領域を中心とすればそれだけ一般性に欠けるといふことにはならない。

K は、通時論・共時論の区別はされていないが、英語の語形成 (Wortbildungslehre) に関してはじめて体系だててまとめられた研究であって、伝統文法における本格的な英語語形成論はここから出発していると言えよう。K によると、複合形容詞 (Zusammengesetzte Adjektiva) は大きく 12 に、下位区分をして 19 に分けられる (§§ 138-64)。それらを例 (ここでは現代英語に限る) を添えて示すと、

1. 実詞+形容詞 (heaven-bright)
2. 形容詞+形容詞 (bitter-sweet)
3. 数詞+形容詞 (thrice-noble)
4. 副詞+形容詞 (over-bold)
5. 動詞+形容詞 (tire-some)
6. 実詞+実詞 (life-size)
7. 形容詞/数詞+実詞 (mad-brain, three-foot)
8. 派生接辞 -ed が付くもの

- a) 形容詞+実詞 (dark-eyed)
 - b) 数詞+実詞 (one-eyed)
 - c) 副詞+実詞 (well-tempered)
 - d) 実詞+実詞 (swallow-tailed)
9. 動詞+実詞 (break-neck)
10. 分詞が付くもの
- a) 実詞+現在分詞 (soul-shaking)
 - b) 実詞+過去分詞 (wind-dried)
 - c) 形容詞/数詞/副詞+現在分詞 (wide-spreading, forthcoming)
 - d) 形容詞/数詞/副詞+過去分詞 (clean-cut, all-abhorred, well-bred)
 - e) 過去分詞+前置詞 (fallen-of)
11. 接続詞によるグループ (cut-and-dried, deaf and dumb)
12. その他の結合グループ (old-maidish, the to-and-fro-conflicting wind)

となる。全体として形容詞の働きをするものを複合形容詞として、その構成要素の品詞（および屈折・派生）によって分類したものである。だが、3, 5 は「あまりない」「非常にまれ」とだけのべて、現在では非生産的なものにもかかわらず歴史的理路のために並べられている。5 は現在からみれば派生語に入るのだが、中には *buxom* も例として含まれている。さらに、数詞 (Numerale) には *one*, *thrice*, *all*, *many* などが含まれて品詞分類そのものにも問題があろう。

Ma (pp. 84-95) における複合形容詞はかなり限定されている。これは、形態にかなり重きをおいた J を基本的には踏襲したものであろうが、第一要素に実詞・代名詞・形容詞、第二要素に形容詞・現在分詞 (Ma の用語では *first participle*)・過去分詞 (Ma では *second participle*) がくるもののみを複合形容詞とする。つまり、第二要素が形容される名詞の主要語に対して形容詞的な働きを持たないもの（たとえば *colorfast cloth*）はそれが全体として形容詞であっても複合形容詞とは考えない (pp. 14-5)。J では大きく (1) 実詞+形容詞/分詞, (2) 代名詞+形容詞/分詞, (3) 形容詞+形容詞, (4) 不変化詞 (*particle*)/分詞, と分かれていたのだが、Ma は処格的な不変化詞 (*locative particle*) を第一要素とする結合語は品詞を問わず別扱いになっており (pp. 109-121), *far-fetched* の *far* は形容詞に含まれる。なお、J の (3) には形容詞+分詞も含まれる。さらに、代名詞とは J では *all* のみをあげ、Ma では *all* および *self* のみである。Ma は強勢の型も考慮に入れて、以上のよう

な要素の組み合わせにより次のように全部で大きく9つの型に分けられている。

1. 実詞＋形容詞 (colorblind/grass-green)
2. 代名詞＋形容詞 (self-adaptive/all-able)
3. 形容詞＋形容詞 (icy-cold/Anglo-Norman)
4. 実詞＋現在分詞 (heart-breaking/ocean-going)
5. 代名詞＋現在分詞 (all-seeing/self-advertising)
6. 形容詞＋現在分詞 (easy-going)
7. 実詞＋過去分詞 (man-made)
8. 代名詞＋過去分詞 (all-abhorred/self-made)
9. 形容詞＋過去分詞 (high-born)

Ma における主たる目的は “to illustrate those derivative types which characterize the Present-day English linguistic system” (p. 8) であるから、K のように tiresome などを複合語に入れることはしない。また K の (8) にある dark-eyed などは派生接尾辞 -ed のところ (pp. 265-67) で扱われることになる。一見するときわめてすっきりとした分類になっているようだが、hard-working, far-reaching が6に入れられ、oncoming, overanxious は第一要素が不変化詞という理由でこの分類の対象からはずされ、さらに「代名詞」とわざわざあげられているものは、実際には all- と self- のみでむしろこの語形を表すために無理に作った規準と思える。それゆえ、この分類の内容はそれほど統一がとれているわけではない。また、先ほどの colorfast などを「形容詞化された文 (adjectivized sentence)」と言うのだが (p. 15), それならば少なくとも分詞を第二要素に持つものにも同じことが言える。そして、表面的に第二要素と名詞主要語とが述部-主語の関係になっていない、つまり構造言語学的に言えば内心的構造 (endocentric construction) でない、からといって除くことに妥当性があるだろうか。またこの反対に、明らかにこの規準に合わない fair-spoken などを、単に第二要素に過去分詞があるからと言って9の型に分類するのは矛盾である。

Q (pp. 1027-28) は簡単に表として扱われているだけであるが、表面的な言い替え (paraphrase) との対応を十分に考慮に入れつつ、大きく3つに、さらに区分しても8つに分けている。これは、初期の変形文法の方法 (たとえば Lees 1960 の複合名詞の方法) に似ている。

I. 動詞と目的語

1. 目的語+-ing 分詞 (man-eating)

II. 動詞と副詞類 (adverbial)

2. 副詞類+-ing 分詞 (ocean-going)
3. 副詞類+-ed 分詞 (heartfelt)
4. 形容詞/副詞+-ing 分詞 (hard-working)
5. 形容詞/副詞+-ed 分詞 (quick-frozen)

III. 無動詞 (verbless) 複合語

6. (関連を示す) 名詞+形容詞 (class-conscious)
7. 名詞+形容詞 (grass-green)
8. 等位関係にある形容詞₁+形容詞₂ (Swedish-American)

これは、1には“X eats man”, 2には“X goes across oceans”というような言い替えを中心にして分けたもので、それゆえ表面的には同じ「名詞+-ing 分詞」であっても1と2に、「名詞+形容詞」は6と7に、また self- が付くものも1では目的語 (self-defeating) に3では副詞類 (self-employed) に分けられる。もちろんこのようなちがいが知られていなかったわけではないが、これまではむしろ下位分類などで利用されたにすぎず、あくまで形態と品詞が中心であった。また、すべてに文と対応させた点が特徴的であって、それゆえ文の種類に従って大きく3つに分けられそれから言い替えによって形態などとの対応を見ている (このことは複合名詞の場合も同様である)。なお、複合語とされているものは、ほぼ Ma と同じである。

A (pp. 92-101) は、複合形容詞をより広い範囲でとらえているという点で K に似たところがあるが、その分類規準にはいろいろなものがあり、それらを組み合わせで細かな分類を行なっている (大きく 10, 下位分類で 27 になる)。なお、不変化詞を第一要素とするものは別に扱う (pp. 113-)。

I. 付加詞 (adjunct)-動詞

- A. 副詞+形容詞 (evergreen)
- B. 副詞+動詞+-ing (a. 他動詞 far-seeing, b. 自動詞 easy-going)
- C. 副詞+動詞+-ed: 1. 能動的 (a. hard-bitten, b. high-flown)/2. (a. (受動的) clean-shaven, b. full-fledged)

II. 主語-動詞/補語

- A. 名詞+動詞+-ed (a. communist-infiltrated, b. crest-fallen)

B. 名詞＋形容詞 (colorfast, self-complacent)

III. 動詞－目的語

A. 名詞＋動詞＋-ing (all-embracing)

B. 名詞＋動詞的形容詞 (germ-resistant)

C. 名詞＋動詞＋-ed (air-conditioned)

IV. 同格的 (foolish-witty)

V. 具格的

A. 名詞＋形容詞 (bomb-happy)

B. 名詞＋動詞＋-ed (air-borne)

VI. 処格的

A. 処格名詞＋形容詞 (world-famous)

B. 処格名詞＋動詞＋-ed (country-bred)

VII. 比較的

A. 強意的: 1. 名詞＋形容詞 (crystal-clear)/2. 動詞＋-ing＋形容詞 (freezing cold)

B. 特殊化的: 1. 名詞＋色彩形容詞 (ash blond)/2. 名詞＋範囲または計測の形容詞 (day-long, knee-deep)

VIII. 前置詞的

A. 名詞＋形容詞 (accident-prone)

B. 名詞＋動詞＋-ed (canal-built)

IX. 派生的 (broad-minded, chicken-hearted)

X. 名詞的限定詞

A. 動詞＋目的語名詞 (catch-penny)

B. その他 (all-time, white-collar)

この分類の規準は独創的ではあるのだが、格 (case)・品詞・形態・意味などとさまざまなものが動員されており、この点で理論的とは言いかねる。A が複合名詞の分類のところで “This classification is not a ‘tidy’ one: that is to say, various different ways of analysing the examples are used”. (p. 61) といったことはそのままの場合にもあてはまる。しかるに、察するところ直観的に分けられた（つまり結論が先にきている）資料に対していろいろと規準を考えていったらしく、いろいろな観点から批判はできるのだが、言語的事実の観察については資するところが大きい。

Me (pp. 125-203) は全巻を複合形容詞にあてているので最も詳しいのは当然のこ

とであり、変形生成文法の枠の中でその成果を十分に利用したという点で特徴的である。方法としては、まず「言い替え可能性の条件 (phrasability conditions)」(p. 85) に立って複合語の認定と分類を行ない、根底にある構造とそれに適用される変形規則のちがいによって型 (pattern) に分類されている。もちろん、他の分類と似たところも少なくないのだが、表面構造によるもの (p. 105 にその例が示されている) ではない。それゆえ、複合形容詞を単独では考えず常に文との対応によって扱われている (例も、名詞句の中であるいは文の補語という形をとっている)。複合語の認定については、Ma や Q よりは広く、K よりはやや狭い。そして、表面的には一見して区別のつかない多くの構造を区別している。たとえば、her childbearing age, easy-going habits などは複合名詞 (の限定的用法), a goatee-bearded reporter, a double-barrelled gun などは派生的結合 (derivative combination) としている。型は大きく A—E までの 5 つに、下位分類が 33 となる (なお、複合名詞・派生的結合などもそれぞれ問題となる個所で扱われているが、ここでは省略する)。

- A-1. [N+V-ing], [PRN+V-ing] (a. sun-worshipping tourists/b. law-abiding citizens/c. a self-winding watch)
- A-2. [ADJ+V-ing] (pleasant-smelling tablets)
- A-3. [ADV+V-ing] (a. the fast-growing economy/b. a slowly-moving bus)
- A-4. [P+V-ing] (incoming calls)
- B-1. [N+V-en], [PRN+V-en] (a. moth-eaten clothes/b. the air-conditioned office/c. the self-appointed committee/d. a sealed-for-life system)
- B-2. [ADJ+V-en] (a ready-made morality)
- B-3. [ADV+V-en] (a. hard-hit crops/b. a much-travelled businessman)
- B-4. [P+V-en], [V-en+P] (a. laid-off workers/b. the broken-down car/c. the up-swept line)
- C-1. [ADJ+V] (his difficult-to-master language)
- C-2. [N+ADJ], [PRN+ADJ] (a. his trouble-free ideas/b. the centuries-old marketplace/c. the two-year-old child/d. a self-conscious man/e. direct-from-factory prices/f. a spurious-to-me decision)
- C-3. [ADJ+ADJ], [ADV+ADJ] (a. the red-brown cavern/b. her pearly-grey hair/c. bluish-green water/d. a fully-adjustable construction)
- D. [P+N], [P+PRN] (off-shore fields)
- E-1. [V+V] (hearsay evidence)
- E-2. [V+N], [V+PRN], [PRN+V] (tell-tale footsteps)
- E-3. [V+ADJ] (a drip-dry shirt)
- E-4. [V+ADV] (the die-hard civilians)
- E-5. [V+P] (a tuck-in blouse)

分類方法は Q と似ているところがあるが、より深い構造から変形によって派生できるものを扱っているので、その範囲ははるかに広い。たとえば D, E は Ma や Q では除かれていた。ただし文から派生させるので V (動詞), ADJ (形容詞), P (前置詞)+N (名詞) のいずれかは含むことになる (なお, PRN は左枝分れ (left-branching) の場合は前置詞が削除される前置詞付名詞)。この点で派生句と区別されている。全体としては変形生成文法によっているが、書かれた資料を集めて分類していることなどは伝統文法的であるし、複合形容詞の個々の例の強勢については Ma や A のほうが注目している (もちろん、音韻論における複合語規則については pp. 89-93 でふれている)。ただ、理論的には最も考察されているとは言っても、相対的にそう言えるのであって、当然限界はありまた多くの問題が残されている。このように文から複合語を派生させることが変形文法学者のすべてが認めているわけではないし、句構造規則と変形規則が複合語の生産性と文法性を説明できるという Me の立場が十分証明されているのでもない。また、レキシコンは記憶されるもので統語部門のみが創造的という考え方への批判 (Cf. Jackendoff 1975) もこれから検討されなくてはならない。Me では暗喩的な意味については “it does not, on the whole, seem to be possible to predict for possible NOVEL metaphorical compounds what characteristic of the concepts involved is going to be selected” (p. 202) と言うし、特異的な複合語には “familiarity breeds idiosyncrasy” (p. 203) と述べてはいるが、いずれもこの研究ではほとんどふれられていない。はたしてこのような図式が正しいかどうかはわからないが、これから意味論的な接近が重要となってこようし、また理論的な修正が常になされている方法によった研究であるから、これはあくまで中間報告という性格を持っているのは言うまでもない。

III

これまで、複合語の扱いにおけるいくつかの問題点を指摘し、またいろいろな分類の特徴をみてきた。そこで、「句派生」をも含めた複合形容詞の生産性と文法性に関係する規則性について、いくつかの型をとりあげて検討することにしたい。伝統文法においても複合形容詞が (表面構造の) 文あるいは文の一部と統語論的關係があることはその分類規準に利用していたし、変形生成文法のようにまず「文」からはじまる句構造規則を持つならば、根底にある構造から派生させることはいくつかの利点があるにちがいない。しかし、それだけではたして説明できるかどうか問題があろう。

まず、きわめて生産的であろうと思える型の~looking を例にとってみよう。これは前章の分類型でいえば Koziol (10-c), Marchand (6), Quirk et al. (4), Meys (A-2) に入る (なお Adams にはなぜかこの型は含まれていない)。

- (8) a. a $\left\{ \begin{array}{l} \text{rural} \\ \text{foolish} \end{array} \right\}$ policeman
 b. a policeman looks $\left\{ \begin{array}{l} * \text{rural} \\ \text{foolish} \end{array} \right\}$
 c. a policeman is $\left\{ \begin{array}{l} * \text{rural-looking} \\ \text{foolish-looking} \end{array} \right\}$
 d. a $\left\{ \begin{array}{l} * \text{rural-looking} \\ \text{foolish-looking} \end{array} \right\}$ policeman

の d における foolish-looking の文法性・意味・形態は b (正確には b に近い根底にある構造だが問題の起きない限りこのような言い方をする) に由来するものであり、*rural-looking の非文法性 (ungrammaticality) も b に求めることができるかもしれない。同様に、*a mere-looking kid, *an old-looking school (“former school” の意味で), *a distant-looking cousin, *a personal-looking friend, *a tactile-looking organ は不適格 (ill-formed) であって、a drowsy-looking policeman, a friendly-looking soldier, a useful-looking tool, a hard-looking surface, a deadly-looking cobra は適格 (well-formed) であることはきわめて簡潔に説明できるようにみえる (以上の例は Bolinger 1967, p. 17)。つまり、不適格な複合語の派生を阻止するには b における文の制限を見ればよいのであって、b と d とで別々に同じ制限を示す必要はなくなる。また、同じ型に属すると思われる smell, taste においても

- (9) a. The flowers smell $\left\{ \begin{array}{l} \text{sweet.} \\ ? \text{sweetly.} \end{array} \right\}$
 b. the $\left\{ \begin{array}{l} \text{sweet-smelling} \\ ? \text{sweetly-smelling} \end{array} \right\}$ flowers
 (10) a. The food tastes $\left\{ \begin{array}{l} \text{delicious.} \\ ? \text{deliciously.} \end{array} \right\}$
 b. the $\left\{ \begin{array}{l} \text{delicious-tasting} \\ ? \text{deliciously-tasting} \end{array} \right\}$ food

のように b の下欄の文法性に疑問があるのはこれが a から派生された証拠とも考えられる。さらに、手元にある用例だけを列挙しても

- (11) an ancient-looking hat, alien-looking words, an angry-looking man, a comfortable-looking man, a comic-looking doll, a fierce-looking man, a foreign-looking man, a gallant-looking ship, a grotesque-looking object, a healthy-looking child, a homely-looking old lady, a quiet-looking old

lady, a stupid-looking face; crafty-looking, cross-looking, deceitful-looking, gloomy-looking, nice-looking, pleasant-looking, weak-looking, wretched-looking

などがあり、このように生産的であることは文において生産性が高いことを示しているのだろう。ついでながら、この型に入る動詞はふつう進行形にならないので、進行形とは別の規則によることになる。しかし、問題がないわけではない。たとえば、

- (12) a. The music sounds alike.
b. the like-sounding music

における語形の相違がある。Meys (p. 135) は (12) の alike における a- について

- (13) a. Their bodies are tanned by *the* sun.
b. their sun-tanned bodies
(14) a. The man is conscious *of* himself.
b. the self-conscious man

における冠詞・前置詞の削除と同様に扱うことを考えているようだが、a- と名詞の前に来る冠詞・前置詞との間にはどのような文法的共通性が考えられるのだろうか。また a- の付く叙述形容詞の場合、たとえば asleep では

- (15) a. The people looked asleep.
b. *the sleep-looking people

となり Meys の方法も一般性があるか疑問である。次に、

- (16) a. the good-looking person
b. the well-looking person

において、b の well-looking は現在ではあまり使われることのないと思われる複合形容詞ではあるが (COD, Chambers には収録, OED は “Formerly very common, but now less usual than *Good-looking*” と注記; Web 3 にはなし), 意味は a と変わらないのが普通であろう (ただし Kingdon 1958, p. 166 では, well-looking は “handsome”, well-looking は “healthy” と言う)。ところが

- (17) a. The person looks good.
b. The person looks well.

では、a が “The person has a good appearance” であるのに対して b では “It looks as if the person is well” の意味である (Quirk et al., p. 239)。それならば well-looking はなぜ (17) b ではなく (17) a と同じ意味になるのか、また (17) b と同じ意味になるにはなぜ well-looking ではなくて well-looking とならなくてはならないのだろうか。これを変形によって文から導くことは不可能に見える。

こんどは、いわゆる「self-ing 形容詞」の場合をみよう。

- (18) a. Max $\left. \begin{array}{l} \text{shot} \\ \text{killed} \\ \text{cut} \end{array} \right\}$ himself.
 b. *Max is self- $\left. \begin{array}{l} \text{shooting.} \\ \text{killing.} \\ \text{cutting.} \end{array} \right\}$
- (19) a. Minnie dressed herself.
 b. Minnie dressed.
 c. *Minnie was self-dressing.
- (20) a. Sibyl behaves herself.
 b. *Sibyl is self-behaving.

Chapin (1967, pp. 20-47) は、(18) b における非文を説明するために文法的であるためには総称的であること (/+generic/) をはじめ考えたが、結局 (19) のような中間再帰形 (middle reflexive) および (20) のような絶対再帰形 (absolute reflexive) の2つのみが SELFING の規則には適用されない (つまり /-middle/, /-absolute/) とした。Chapin 自身もこの規則の限界を述べているが、Chomsky (1970, pp. 213-14) はさらに「self- 複合語」全般にわたって

- (21) a. John sent a self-addressed envelop.
 b. This is clearly a self-inflicted wound.
 c. The prophecy is self-fulfilling.
 d. Confrontations between students and administration are self-generating.
 e. John is self-educated.
 f. John's remarks are self-congratulatory.
 g. John's actions are self-destructive.

の例をあげて、これらは統語上の起源 (source) のない (無理に作れば意味を成さなかったり、非文法的になる) 文に起こりうることを理由に「語彙的立場」の根拠の一つとした。しかし Meys (pp. 46-52) は、まず a-c は Chomsky の言う「動名詞的名詞類」、f-g は「派生名詞類」のようなもので、少なくとも a-c は変形によって派生されたものとする。また論理的な意味関係ではなく文法的に根底にある構造から派生できるかを問題にすべきであると述べ、c に対しては

- (22) The prophecy fulfills itself.

という適格な文が考えられるし、a, b をそれぞれ “editor-addressed letters”, “enemy-inflicted wounds” と対比しつつ

- (23) a. Someone_i addressed the envelop to someone_i.

- b. Someone_i inflicted the wounds on someone_i.

からの派生を提案し, e については

- (24) a. *John was educated by himself.
b. John was educated by himself.

における a ではなく b の「強意形 (emphatic form)」(Cf. Postal 1971, pp. 230-39) から派生できると言う。しかし, このような方法がその場限りのものとならないためには

- (25) a. Harry shaved himself.
b. Harry was shaved by himself.
c. *Harry was self-shaven.

のような制限も定式化されなくてはならない。

また, きわめて生産的であることがよく知られている red-haired などのいわゆる「並置総合複合語 (parasynthetic compound)」を例にとってみよう。すでにこの型は「複合語」に含めない立場が多いことをみてきたが, 共通する問題を含んでいると思われるのでここで扱うことにする。これは

- (26) a. The hat has a narrow brim.
b. the hat with a narrow brim
c. the narrow-brimmed hat

における c の構造であり, 一般に “have” を含む a のような文に対応すると考えられる。しかし “have” を含む文のすべてが c のように言い替えられないことも明らかであり,

- (27) a. The man has a blue car.
b. *the blue-carred man
c. The man has two brothers.
d. *the two-brothered man

における b, d は不適格である。他にも, *strong-angered, *weak-joyed などの例をみるとこの型の派生が可能となる名詞または名詞句には一定の制限が考えられる。Adams (p. 100) は “One group of Derivational adjective compounds contains a human or animal attribute, mental or physical, as second element” と述べているが, a flat-roofed house, a right-angled triangle, a medium-sized horse, a steep-sided channel, a long-handled tool をみるとこの名詞は「譲渡不可能の名詞 (inalienable noun)」と思われる。Fillmore (1968, pp. 61-81) および Chomsky (1970, pp. 200-1) は, 特に属格名詞について, この譲渡不可能な所有が関係してい

るとして、英語においても譲渡可能な所有と区別することを述べている。彼らの言うものは、身体の部分・精神的属性に加えて親族関係を示す語まで含むのだが、少なくとも英語の並置総合複合語の場合には親族関係の語が含まれないことは (27) d の例を見れば明らかである。また *a haired [headed, nosed, legged] man, *an eyed man, *a paged book, *a sized family, *a featured girl がいずれも不適格であり a legged desk, an eyed needle, an eared owl, the fingered roots of giant trees (Web 3) は適格であること (なおこの場合、譲渡不可能なものではないので、当然比喩的な意味になる), また *a doored house は不可であるが a balconied [verandahed] house, a dresser with doored compartments (Web 3) は可であることを見ると、この区別にはかなりの妥当性があるように思える (Cf. Hirtle 1970; Ljung 1970, pp. 79-80; Ljung 1974, pp. 81-3)。とすれば、派生接尾辞 -ed は単一名詞の場合は、譲渡不可能なものには付かず、形容詞+名詞の場合その名詞は譲渡不可能なものとなる。この両方の場合をまとめるとなると、譲渡可能—不可能という規準よりも、「付随性 (incidence)」(Hirtle 1970) の程度を考えたほうがよいだろう (*an eyed man; ?a two-eyed man; a one-eyed man, a blue-eyed man を比較せよ)。そうすれば、a no-coated cabman, a white-spotted red coat における説明が可能となるかもしれない。

「付随性」だけでは不十分であることは

- (28) a. The man has a broken $\left\{ \begin{array}{l} \text{heart.} \\ \text{arm.} \end{array} \right\}$
 b. the broken- $\left\{ \begin{array}{l} \text{hearted} \\ \text{*armed} \end{array} \right\}$ man

のような例を説明できないことから明らかである。Mitchell (1966, pp. 346-7) は、broken-hearted が可能で *broken-armed が不可能なのは、後者が暗喩的ではないからであると言う。これによれば、まず第一要素に分詞的な -ed, -en がある場合は非文法的になるが (たとえば, *damaged-fronted, *crushed-legged), 分詞的でない -en は可能である (たとえば, flaxen-haired, waxen-faced)。また、第一要素に -y, -en を含んだ場合 (たとえば, glassy-eyed, mealy-mouthed) は「暗喩 (metaphor)」であり, glassy-eyed, *glass-eyed (義眼の) の文法性の相違も暗喩的であるかないかに基づくとしている。しかし、それでは, *glass-eyed がなぜ glassy-eyed と同じ暗喩の意味を持つと仮定しても文法的ではないのだろうか (Cf. almond-eyed, eagle-eyed, lynx-eyed)。また, cloven-footed の場合の cloven を cleave の過去分詞で

はなく形容詞としたとしても, broken-backed, broken-kneed, broken-mouthed (これらの意味は *Web 3* を参照) までも「暗喩的」とするのなら「暗喩」の規準をどこに求めたらよいだろうか。さらに,

- (29) a. The man has $\left\{ \begin{array}{l} \text{a small mind.} \\ \text{?an absent mind.} \end{array} \right\}$
 b. the $\left\{ \begin{array}{l} \text{small-minded} \\ \text{absent-minded} \end{array} \right\}$ man
- (30) a. The man has a long head.
 b. the long-headed man

をみると (29) ではいずれも「暗喩的」である。しかし “having an absent mind” とはふつうは言わない (Adams, p. 100)。また, (30) の場合は, a は文字通りの意味のみであるが, b は比喩的な意味のみである (Adams, p. 100)。次に,

- (31) a. The boy has blue eyes.
 b. the blue-eyed boy

では, b のみが多義で暗喩的意味 (“favorite, darling”; *OED Supple* を見よ) がある (この種は多い; fair-haired, long-faced, long-haired など)。さらには wrong-headed のように根底にある動詞句 (または文) を想定できないものがある。これらをまとめると, 暗喩には暗喩性の度合い (degree of metaphoricalness) があり, その程度が特に高いものは義務的に形容詞化されることになる。つまり

- (32) a. small-minded
 b. absent-minded
 c. wrong-headed

の3種が認められ, a は動詞句としても可能なもの, b はふつう形容詞化されるもの, c は義務的に形容詞化されるものとなる。また (31) のようなものは, 暗喩的意味のみが c に入ることとなる。ところが, (32) c に入るものを根底にある構造から派生させるとするのなら, 非文法的な文を句構造規則と変形規則によって作り出さなくてはならなくなる (この点において, to kick the bucket とか to pull a person's leg のようなイディオムとは扱いを同じにするわけにはいかない)。さらに, (30) において, a はなぜ形容詞化がされないのか, という問題も生じてくる。これまで, 暗喩性を「形容詞+名詞」(特に形容詞) の問題としてとらえてきたが,

- (33) a. *The musical composition has four hands.
 b. the four-handed musical composition

をみると, a の “four hands” には暗喩性はほとんどない (もちろん「4本の手」ではなく「2人」という意味での暗喩性はある)。

- (34) a. *The saw has two hands.
 b. the two-handed saw
- (35) a. *The card game has four hands.
 b. the four-handed card game
- (36) a. *The race has three legs.
 b. the three-legged race

(33) よりも (34), (35) のほうがもしかすると程度が高いかもしれないが、問題になるのは hand の意味であって two, four ではない。これらに比べると (36) はより暗喩的と言えようが、この暗喩性は three legs が大いにかかわっているのではない (cf. a three-legged stool)。また

- (37) a. The pitcher has a left hand.
 b. the left-handed pitcher

にしても、a, b が同じ意味とならないことは、“left hand” に問題があるのではない (なお、b が「左手を持った」の意にならないのは、前にのべた「付随性」に関係してくるのかもしれない)。そうすると (33)–(37) では、むしろ “have” と “-ed” に問題があるように思われる。つまり、暗喩性は名詞ではなく動詞句全体について考えなくてはならない。ところが、(29) の ?to have an absent mind よりも (34) の *to have two hands がより暗喩的であるとは、どのようにして決めたらよいであろうか。伝統文法の方式に従うのなら、特に hand などと結びつくときに派生接辞 -ed には “having” の他に “requiring” などの意味があると記述すればよいのかもしれないが、もちろんなぜそうなるのかという答にはならないし、一般化とは離れることとなる。次に (30) に関連して

- (38) a. The pike has a long head. (pike: やりの穂先)
 b. the long-headed pike

では、a, b の意味は同じで暗喩性はないと考えられ、いずれも (30) b の long-headed の意味にはならない。また (31) に関連して、a blue-eyed boy と a blue-eyed girl を比べると、後者が暗喩的になる可能性は少ない (同様に、a fair-haired boy [girl], a long-haired pianist [husband] さらには a left-handed compliment [pitcher], the three-legged race [stool])。それならば、暗喩性は動詞句にあるのではなく文ということになる。しかし、中間的にせよ非文法的な構造を文法的な構造と同じように派生させることには問題があるし、はたして暗喩性の標識を付けて派生させることができるかわからない。これに対して、この暗喩的な意味を派生後の表面構造において決めることにすれば、暗喩性の度合いによる文法性の相違を言うことがで

きなくなる。

最後に、次のような能動・受動の関係が一見すると逆転している例をみよう。

- (39) a. a man who speaks well
 b. *a man who is well spoken (a の受動形として)
 c. a well-spoken man
- (40) a. countries where $\left\{ \begin{array}{l} \text{they speak English} \\ \text{English is spoken} \end{array} \right\}$
 b. ?countries which speak English
 c. English-speaking countries

それぞれ c に対しては b ではなく a が対応するものと思われる。(39) の場合、他にも broad-, civil-, fair-, free-, out-, plain-, short-, soft- (以上 Marchand, p. 94); gruffly-, quiet- (以上 Meys, p. 166) が可能であることを見るとかなり生産的であると思えるし、(40) において countries ではなく region ならばほとんどすべての言語名と結びつく。もちろん、well-spoken words (*Web 3*) あるいは English-speaking peoples ならば文との対応を認めることがそれほどむずかしくはないが、(39), (40) において $a \Rightarrow b$ という変形はまず無理であろうし、少数の特定の語にだけ $a \Rightarrow c$ を認めることは例外を扱う便法であってこの派生を説明はしていない。同じく

- (41) a. This passage is well read.
 b. this well-read passage
 c. He is well-read in English literature.
 d. the well-read man

の c, d は (39) と同じむずかしさがある (なお, "This play *reads* better than it acts" あるいは reader (読本) の「受動的」意味と関係があるのか、今のところはわからない)。

IV

以上のように、少数の複合形容詞を検討してみても、変形的処理方法ではきわめてむずかしい例がある。たしかに、かなり適用範囲の広い規則を作ることもできるし、文法性と生産性とが認められる以上、複合形容詞が個々別々に派生されるはずがない。そこで現状としては、変形的派生方法に不備があることは確かであるが、これを改善し克服することが可能と考えるかあるいは致命的欠陥と考えるかによって進む方向が分れよう。別の方法ということになると、余剰規則を用いてレキシコンの中に語形成

に関する情報を含むことが考えられているが (Jackendoff 1975), そのような結論に達するにはこれからの研究にまたなくてはならないのは言うまでもない。さらに、複合語形成の規則をつくるには、その要素となる語の統語論的・意味論的特徴がもっと解明されなくてはならず、そうなれば文法のしくみ全体における語形成の位置や役割もおのずからだんだんと定まってくるであろう。

参 照 文 献

- Adams, Valeric. 1973. *An introduction to Modern English word-formation*. London: Longman.
- Bolinger, Dwight 1967. *Adjectives in English: attribution and predication*. *Lingua* 18. 1-34.
- Chapin, Paul G. 1967. *On the syntax of word-derivation in English*. Unpublished Ph. D. dissertation, M. I. T.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass : MIT Press.
- . 1970. *Remarks on nominalization*. In *Readings in English transformational grammar*, eds. R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, pp. 184-221. Waltham, Mass.: Ginn.
- Fillmore, Charles J 1968. *The case for case*. In *Universals in linguistic theory*, eds. E. Bach and R. T. Harms, pp. 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Hatcher, Anna Granville. 1951 *Modern English word-formation and Neo-Latin*. Baltimore: Johns Hopkins Press.
- Hirtle, W. H. 1970. -Ed adjectives like 'verandahed' and 'blue-eyed'. *Journal of Linguistics* 6. 19-36.
- Jackendoff, Ray. 1975. *Morphological and semantic regularities in the lexicon*. *Language* 51 639-71.
- Jespersen, Otto. 1942. *A Modern English grammar*, VI. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Kingdon, Roger. 1958. *The groundwork of English stress*. London: Longmans.
- Koziol, Herbert. 1937. *Handbuch der Englischen Wortbildungslehre*. Heidelberg: Carl Winter.
- Lees, Robert B. 1960 *The grammar of English nominalizations*. The Hague: Mouton.
- Ljung, Magnus. 1970. *English denominal adjectives*. Lund: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- . 1974. *Some remarks on antonymy*. *Language* 50. 74-88.
- Marchand, Hans 1969. *The categories and types of present-day English word-formation*, 2nd edition. München: C. H. Beck.
- Meys, W. J. 1975. *Compound adjectives in English and the ideal speaker-listener*. Amsterdam: North-Holland.

- Mitchell, T. F. 1966. In *In memory of J. R. Firth*, eds: C. E. Bazell et al., pp. 335-58. London: Longmans
- Postal, Paul M. 1971. *Cross-over phenomena*. New York: Holt, Rinehart and Winston
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1972. *A grammar of contemporary English*. London: Longman.
- 桜井雅人. 1971. 英語語形成の共時論的研究について. 東京商船大学研究報告 (人文科学) 22. 1-13.

辞書類

- Chambers*: Chambers Twentieth Century Dictionary (1972)
- COD*: The Concise Oxford Dictionary, 6th edition (1976)
- OED*: The Oxford English Dictionary (1933)
- OED Supple*: A Supplement to the Oxford English Dictionary, Vol. I (1972)
- Web 3*: Webster's Third New International Dictionary of the English Language (1961)